

第1問 次の文章を読んで、後の問い（問1～7）に答えよ。（配点40点）

ずっと気になっていたことがある。それは、なぜサルたちは私たちのように群れを自由に出入りしないのだろうか、ということである。

サルのオスもメスも、思春期になるまで決して群れから離れない。子どもが群れからいなくなれば、a それは死を意味する。多くのサルたちでは、オスは成長すると群れを出ていくが、メスは自分が生まれた群れにとどまり、子どもを産んでいく。メスが群れを出て行かないのは、出産や子育てをするうえで外へ出て行くことがb 不利になるからだ。

人間に近い類人猿は、サルとは逆にメスが群れを渡り歩く。ゴリラのオスは思春期に群れを離れることが多いが、他の群れに加入することはない。チンパンジーのオスは一生自分の生まれた群れから離れない。性の季節はサルではオスに、類人猿ではメスに、親元を離れて血縁関係のないパートナーを作るように働きかけるのだ。

奇妙なことに、サルも類人猿も一度群れを離れると、c 元の群れへ戻ることはない。それは、群れに戻ろうとすると、元の群れの仲間たちから攻撃を受けて追い出されてしまうからである。おそらく、そのサルが不在の間に新しい社会関係ができてしまいい、元の関係に戻れなくなってしまうからだと考えられる。d 群れを離れたゴリラのオスが元いた群れと接触すると、父親や

兄弟のオスから強い反発を受けるし、チンパンジーのオスは数週間姿を消しただけで、元の仲間から一斉攻撃を受けて殺されることがある。サルや類人猿の社会では、不在は2 社会的な死を意味する。不在の後、元の社会関係を修復することは至難の業なのである。

サルや類人猿と比べると、人間はなんと許容に満ちた社会を作ってきたことか。私たちは日々さまざまな集団を渡り歩いて暮らしているし、3 数十年の不在もまるでなかったかのように受け入れてもらうことができる。ただ、それはおそらく最近の人間社会が

e 到達できた仕組みなのではないだろうか。日本でも近年まで住んでいる土地を離れるにはお上の許可が必要だったし、各都

市には関所が設けられて出入りが厳しく監視されていた。私がゴリラの調査をしていたアフリカの熱帯雨林では、街道沿いの村の真ん中に壁のない休み場所が設けられている。旅人はそこにまず腰を下ろして自分の素性を述べる。村人はそれを聞いて、群れへの滞在や先へ進むことを許可する。出される飲み物や食事はその判断の結果である。危険と思えば、毒を盛ればいい。文字のない世界で暮らしてきた人々にとって、旅人は外の世界とをつなぐ情報源であると同時に、村に災厄をもたらす源泉でもあるからだ。【A】

そのため、一度出て行った仲間が戻ってきたときも、同じような扱いを受ける。外の世界で何を身につけてきたかを精査する必要があるからだ。【B】ただ、人間は不在の日々があっても親族や幼なじみに頼れるので復帰は困難ではない。人間には元の関係を今の関係に反映させる能力がある。言葉によって不在の仲間のうわさをし、まるでそこにいるかのような扱いをすることができるのだ。父親が長期に海外へ出張しても、食卓にその席は刻印されており、衣服や趣味の品々が父親の存在を常に示し続ける。何より、父親に関するうわさが絶えないことが父親を不在のまま温存することにつながる。父親に限らず、大切な仲間を物によって記憶し、うわさにすることで私たちは不在を黙認し、関係の断絶を留保してきたのではないだろうか。【C】

ところが、昨今の人間社会は次第に不在を許容できなくなっているように私は感じる。常に顔を合わせていないと仲間外れにされたり、携帯電話をオンにして仲間からの問いかけに即座に応じなければ、友達から拒否されたりするような閉鎖的な感性が育ち始めている。【D】それは人間の歴史に逆行し、サル社会に戻ることで私と思う。不在を許容し、自在に集団を渡り歩けるからこそ、人間は複雑に分化した社会を築くことができたはずなのだ。IT時代の信頼関係の作り方を、過去を参照してもう一度考え直すべきではないだろうか。【E】

(山極寿一「不在を許す心」)

問1 傍線部1に対して、筆者はその理由をどのように考えているか。本文中から解答欄に合うように四〇字で抜き出し、その最初と最後の五字を記せ。

〔解答欄〕 □□□□□ から。

問2 空欄 a) e に入る言葉として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

ア いったん イ ほとんど ウ めったに エ やつと オ はなはだしく

問3 本文中で傍線部2と同じ意味で使われている言葉はどれか。最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 一斉攻撃 イ お上の許可 ウ 仲間外れ エ 厄災をもたらす オ 海外へ出張

問4 傍線部3とあるが、なぜ人間社会は長期間不在にしていた人物を受け入れることができるのか。その理由として最も適当なもの、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 人間どうしで常に顔を合わせたり問いかげに即答したりすることで、濃密な関係性を構築してきたから。
イ 長期間不在にしていた人物に素性を答えさせる機会を与え、その回答で仲間かどうか判断できるから。
ウ 外の世界をめぐってきた人間は情報や技術を身に付けており、その社会において有益な存在となるから。
エ 不在者のうわさをしたり、その存在を物によって思い出したりすることで、関係の継続を許容するから。

問5 傍線部4とあるが、なぜ近年まで人間社会は旅人の出入りを厳しく監視したのか。その理由を四〇字程度で説明せよ。

〔解答欄〕 45字

問6 傍線部5のような行為が認められる社会のことを、筆者はどのように説明しているか。本文中から解答欄に合う形で抜き出して記せ。

〔解答欄〕 □□□□□ 社会

問7 以下の文章を挿入するのに最も適切な箇所を、本文中の【A】～【E】の中から一つ選び、記号で答えよ。

人間の信頼が、過去ではなく現在の関係によってしか得られないという極めて短絡的な思考がまん延しているような気がする。

このページは空白です。

第2問 次の文章を読んで、後の問い（問1～7）に答えよ。（配点40点）

さまざまな「らしさ」のなかには、「女らしさ」や「男らしさ」、「子どもらしさ」といった「らしさ」のほかに、何かを指し示していない抽象的な「らしさ」がある。「たしからしさ」や「わざとらしさ」、そして「もっともらしさ」のような「らしさ」がそれぞれある。これらのなかでも「もっともらしさ」¹は、「らしさ」が抱える一面を、よく表しているように思われる。「もっともらしさ」という言葉が、何かを装っているけれど実質がないこと、外見やふるまいをまねていても実質がともなっていないことを意味しているとすると、それこそが「らしさ」の性格そのものなのではないだろうか。

期待に応えて理想を実現しているように見えて、そのじつは「もっともらしい」だけだったということは日常生活でもよくあることだ。「女らしいと思っていたら……」、「日本人らしいと信じていたのに……」などというふうに、多くの「らしさ」は裏切られることを前提としているのである。【A】

しかしそれでも、実質をとまなうことが得られそうにないとき、あるいは実在しないものをほかの何かで間に合わせようとするときに、「もっともらしさ」はとても便利で重宝する。だからこそ、私たちはさまざまな場面で、「もっともらしさ」に頼っているのだろう。ものごとの本質が垣間見えたところではなく、「もっともらしさ」を認めたくえで、社会というものをまわしている。「もっともらしさ」は本音に対する建前や、「嘘も方便」^①の方便と、よく似た性質を持っているのではないか。【B】

そんな「もっともらしさ」をよく表わすものとして、私が思い浮かべたのは、「神」である。「神」そのものがもっともらしいというより、「神」の姿を表わそうとするとき、日本では「もっともらしさ」にすぎるしかなかったように思われる。（中略）

この日本列島では「神」はもともと、自然崇拜に由来する姿形を持たない存在だった。山自体を崇め、滝そのものを畏れるのみならず、そこに宿る霊や魂をこそ人々は信仰してきたのである。【C】

しかし、六世紀半ばに仏教が伝来すると、この外来の宗教は皇族や豪族の信心を集めるようになり、国教というべき地位を占めるようになる。【A】、やがて数多くの寺院が建立され、仏像が造られるようになっていった。当時、在来の神を祀る社には、常設

の構造物がないのがふつうで、神は必要なときに岩や境さかいに降ろされ、その際にだけ祭場が仮設されたのである。

このようにして祭場に降ろされる神霊は、おそらくは透明な存在2だったのではないかと思われる。しかし、記紀に登場する神々は、身体や感情を持ち、目に見えるように行動する。「人間らしい」という形容は Y はずなのだが、記紀の神々は超越的な存在ではあるものの、人間のような姿形で想像されていたに違いない。記紀が書かれた時代の人々は、おそらくは彼らの少し前の先祖の姿を、神として思い浮かべていたのではないだろうか。【D】

時代が少し下がり、八世紀半ばぐらいになると「神仏習合」という現象が生まれる。簡単に説明するのが難しい宗教現象だが、手短かに言うと、列島土着の神が、外来の仏に接近していったことをいう。神を祀る社に隣接し、あるいはその境域に、神を守護するという名目で寺院が建立されていった。神仏習合が強まっていく過程で、「仏像」に対する「神像」が生まれた。形のない神に仏像のような姿形をもたせることで、やがて、体系的な「神道」が成立する準備が整えられていったのである。【E】

しかし、仏像は経典儀軌に則して造ることができたが、日本列島の神にはそうした決まりがなかった。そこで先例がないなかで、仏像に範を取りつつ神像を造ろうとしたとき、畏敬2すべき神としての「もっともらしさ」が求められたのである。

神像を初めて造ろうとした人々は、仏像をまねするほかなかった。たとえば精霊のよりどころである山川草木を写すというのではなく、仏像にならって身体を持った像を造ることにしたのである。 B、日本列島の神なのだから、外来宗教の信仰対象である

仏像との違いを出すことにも人々は腐心した。そこで、神木・霊木の素材感をなるべく残すように工夫したり、膝前や脚先を省略したりして、仏像との差別化を図るとともに、 Z を演出したのである。

そもそも、神をどのような姿にするかという課題に関して、その神を祀る人、つまり祭祀者さいし自身をモデルにしたふしがある。つまり、仏教における宗祖像や高僧像とは違う、抽象化された自刻像だったかもしれないのだ。しかし、神を拝する人の姿を表したところで、その像に実体がないことには変わりはない。仏像に劣らない威厳に満ちた彫像を造ってみたものの、もっともらしいだけ、見てくれだけのものだったのだ。

神像が抱えるこうした「もっともらしさ」に、だれひとり疑念を抱かなかったはずはない。そのときに用いられたであろう方便は

「神像は依り代よしろに過ぎない」というものだった。

(畑中章宏「もっともらしさ」による)

(注) 依り代……神霊が寄りつくもの。

問1 傍線部1「もっともらしさ」を具体的に説明している部分を、本文中から一八字で抜き出して記せ。

問2 以下の文章を挿入するのに最も適当な箇所を、本文中の【A】～【E】の中から一つ選び、記号で答えよ。

こうした精霊的な神は、確固とした姿で思い描かれる必要がなかったし、信仰のありようそのものが、その対象に形を求めてはいなかった。

問3 空欄 X 〽 Z に入る言葉として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

X ア 無視する イ 歎喜する ウ 発奮する エ 落胆する

Y ア 合致する イ 矛盾する ウ 類似する エ 並立する

Z ア 自然らしさ イ 人間らしさ ウ 動物らしさ エ 日本らしさ

問4 二重傍線部①・②の言葉の意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

① 方便 ア 省略的な手段 イ 懐疑的な手段 ウ 便宜的な手段 エ 合理的な手段

② 畏敬 ア うれいかなしむ イ おそれうやまう ウ かくしまもる エ ころおどる

問5 空欄 A・B に入る言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

A ア そして イ しかし ウ なぜなら エ ただ

B ア つまり イ しかし ウ あるいは エ たとえば

問6

傍線部2「透明な存在」とは、具体的にどのようなものをさすか。最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 悪心をもつ人々には見えないおそろしい神。
- イ 自然崇拜に由来する姿形のない精霊的な神。
- ウ 神仏習合によって、外来の仏と合体した神。
- エ 身体や感情を持ち人間のような姿をした神。

問7

本文の内容と合致するものを、次の中から二つ選び、記号で答えよ。

- ア 実在しないものや実質がないものを他の何かで表現するとき、抽象的な「もっともらしさ」は役に立つ。
- イ 六世紀半ばに仏教が伝来し、仏像が作られるようになると、神像も仏像のように、リアルに神を再現した。
- ウ 神仏習合が強まってゆく過程で、日本列島の神と外来宗教の信仰の対象である仏像を似せようと努力した。
- エ もともと神は実体がないので、神像を神が宿る「依り代」と理解して、日本人は信仰の対象にしてきた。
- オ 神像は仏像の代替物に過ぎないのだから粗末なものでよいと考え、木や石などの自然物のみで神像を作成した。
- カ 神道を体系化する過程で神像が仏像に置き換わり、仏教の宗祖像や高僧像をモデルにした像が作成された。

第3問

次の問い（問1～3）に答えよ。（配点20点）

問1

次の①～⑩の傍線部のカタカナを漢字に改め、漢字の読みはひらがなで記せ（漢字は楷書で、いねいに書くこと）。

- ① これはフキユウの名作となるだろう。 ② 貴重な文書をフクセイする。
- ③ シュウチの通り、彼は人格者だ。 ④ 成人式を通過ギレイと自覚する。
- ⑤ ツイトウ式には多くの人が集まった。 ⑥ 向学の精神を養う。
- ⑦ 生憎、次の休日は先約がある。 ⑧ 昔の知己を待つ。
- ⑨ 暫く休暇を取らせてほしい。 ⑩ 企画は漸次進行している。

問2

次の①～⑤の四字熟語について、空欄に当てはまる漢字として最も適当なものを、それぞれ一つ選び、記号で答えよ。

- ① 我 引水（自分の利益になるように考えたり、行動したりすること）
ア 倉 イ 庭 ウ 家 エ 桶 オ 田
- ② 名無実（名前が意味するほど実際には価値がないこと）
ア 高 イ 著 ウ 有 エ 知 オ 偉
- ③ 傍若 人（人前にもかかわらず自分勝手にふるまうこと）
ア 舞 イ 武 ウ 無 エ 賦 オ 夫
- ④ 悪因悪 （かつての悪い行為が原因になって、自分にも悪いことが生じること）
ア 花 イ 化 ウ 果 エ 菓 オ 架
- ⑤ 栄枯 衰（栄えたり衰えたりすること）
ア 勝 イ 敗 ウ 善 エ 盛 オ 愚

問3

傍線部①～⑤を文脈に適した形に直せ。

昨日は祝日だったので、ショッピングモールに行つて、^①買物をする。私の欲しいものは、^②シャツを買うことだ。お店に行く^③と、ちょうどセールをしていた。シャツを買った後は、体を動かしてぐっすり眠るために、^④ジムを行った。しつかり運動したので、^⑤その夜はよく眠れなかった。そのセール品のシャツは、明日着てきたつもりだ。